

康永本真筆本、弘願本、照願寺本

何の文によりて専修の義を(照願寺本)立すべからざるぞや、

西本願寺本

何の文証によりて一向専修の義立すべからざるぞや。

専修寺本

何の文によりて一向専修の義立すべからざるぞや。

のように、真本系はいずれも「何の丈によりて」である。

このうち、第一第二はそれ程大した意味の相違はないが、第三に就いては大変な意味の相違である。もし流布本の如く、三經の文証を引いて後、「いづれの文による」とも、一向専念の義を立すべからざるぞや」となれば、三經の引文に依りて一向専修の義を打消し更に「ぞ」「や」の二つの助詞に依りて一層強く打消した事になる。これでは真宗の宗義は全く成り立たない事になるが、幸に真本系のもは「何の文によりて云々」と反語になって、三經の何れの文に依りて見ても専修の義の立たない事はあるか、立つてはいないと、真正面に専修の義を押し立てているので問題はないのである。

ところが問題は実際の場合で、今全国の末寺が毎年報恩講などに拝読しているのは、恐らく十中八九までは、この流布本系であって、それらは何れもこの誤りを犯しているのである。故に流布本系を以て一般に拝読する場合は、是非この所は「何れの文によりて云々」と流布本の文を改めて拝読する必要がある。

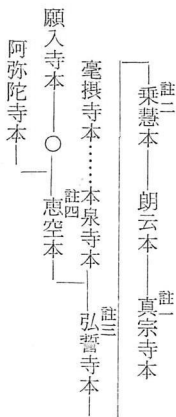
因みに關光寺の蓮師真写本も、このところ流布本の本文と同様で異るところがない。

存覚師筆三經延書に就いて

佐々木 求己

聖教の延書は他門に比して真宗は多いと言はれ、事実、聖教延書の古写本も、必ずしも少くはない。併し、三經延書の古写本は、小浜毫撰寺の乘專筆と言はれる大經延書等があるが、あまり多いとは言へない。親鸞加點の本よりの写しと伝へる本もある事であるから、当然、延書本の古写本がもっと多くともよい筈であるが、不思議に少ない。小生は今、この少ない三經延書の伝統の正しい、然も、史料の少ない存覚と仏光寺了源の關係を示す一本を紹介したい。

昭和三十五年に法藏館より出版された真宗聖典二卷は、底本に就いては比較的責任のある本であるが、その中の三經延書は真宗寺藏、弘化四年写の弘宣筆の七卷本に拠つてゐる。この本は江戸末期の新しい写本であるが、その多くの與書に拠れば、系統の正しい本であり、聖典の編者は写誤も少ないと言ふ。此の本の系統を、その與書により示せば次の如くなる。



註一 真宗寺本は弘化四年、弘宣筆

註二 文政十二年写。乗慧は本宗寺超弘の子で、本泉寺を継いだ人であろう。

註三 江州金堂の弘誓寺本で諦受院恵広の写本。恵広は羽後酒田安祥寺に生れ、弘誓寺に入寺した人であるが、弘誓寺本は慧広が天満本泉寺本に拠り、享保六年に写した本を、享保十七年に恵空筆写本を以て校合した本。

註四 恵空が元禄十年に、願入寺蔵存覚真跡本をその二転本に拠り書写し、その欠卷（上ノ上、下ノ上）を阿弥陀寺本に拠り補った本。

この弘誓寺本の親本たる本泉寺本は、その奥書に拠れば、大経は小浜毫撰寺蔵の、宗祖御点本に依った延書本（筆者は乗専であるが、述者は存覚であろう）の写しであり（直接か否かは不明）、観経も聖人御点の秘本よりの写本の系を引くものであり、小経は欠本であるが、これも小浜の乗専本の系を引くものと考へられる。然も、弘誓寺本は恵空本を以て校合してゐるから、その伝承の価値は充分に重んぜられるが、如何にせん。真宗寺本は転々とした写本である。（本泉寺本は小経を欠く故、弘誓寺本は恵空本に拠る）

小生は十年程前、この恵空本の零本を入手し、それにより、今は願入寺になき、存覚真跡の願入寺本三経延書の存在を知り、久しくこの本の所在を求めてゐた。所が、不思議にもこの本が二三年前に出現し、学友たる東京厩橋源光寺住職浅野長量師の所蔵に帰し、小生の宿願を満してくれる事となった。紙数の関係でその内容の紹介の出来ないのは残念であるが、本は、

七卷。(内、上ノ上、下の上の二卷欠) 緒紙、粘葉綴。25cm 罫
×10.5cm 六行、二十二字前後。空界線入、片仮名附、片仮
名本である。

第一卷 欠。

第二卷 墨付三十一紙。表紙中央に、「无量寿経上末」、左下に「積了源」とある。重誓偈以後卷末まで。

第三卷 欠。

第四卷 墨付四十二紙。表紙中央に、「无量寿経下末」、左下に、「積了源」とある。「仏弥勒ニツケタマハリ」(法蔵館

本P.8 卷末)より卷末まで。

第五卷 墨付四十二紙。表紙中央に、「観无量寿経本」、左下に、「積了源」とある。卷初より第十三観まで。

第六卷 墨付廿二紙。表紙中央に、「観无量寿経末」、左下に「積了源」とある。第十四観以後卷末まで。

第七卷 墨付十六紙。表紙中央に、「四紙阿弥陀経」、左下に、「積了源」とある。

尚、当本には奥書等は無く、「御経延書、五卷、常楽台存覚上人御筆」と表に、内底に、「常洲鹿島郡水戸磐舟山、大網願入寺如願」と記した江戸中期頃の箱に入っている。

当本には奥書が無いので、筆跡鑒定と伝承によるより他はないが、筆跡より見て、明らかに存覚真筆なる伝承は信ぜられる。この事に関しては、二三の先輩の意見も求めたが、総て一致している。表紙内容同筆であり、非常に謹厳に書写されて居り、少しの乱れもない。

存覚が、三経を延書し、仏光寺了源に与へたものであり、存

覺と了源の關係を示す史料の少ない今、非常に貴重な本である。併し、願入寺に入った経路は不明である。了源は問題の多い人であるが、存覺との關係の生じたのは、元応二年存覺三十一歳の時であり、存覺四十六歳の建武二年末に死亡と伝えられているから、この本の書写は此の間、即ち、存覺三十一才より四十六才の間と考へられる。若し、関東に於ての書写とするならば、存覺三十二三か、四十二三の筆となるが、これを決定すべき史料は無い。

尚、当本の紙数が、一期記に見える、「大経筆料紙事」のそれと一致しないが、それは行数の差によるものであろう。惠空本は一致する。因に、当本は惠空の当時のままに保存されて居り、惠空本に見える阿弥陀寺本は、常陸額田の阿弥陀寺本と思はれ、これも願入寺本のはしではないかと考えられるが、今は不明である。

真俗二諦につきて

調 円 理

苦集滅道の四諦では、苦集二諦が俗諦であり、滅道二諦が真諦である。苦集二諦は現実の人間生活の真相を諦かにするものである。人間の生活は表面には楽しい相もないではないが、その底には一貫して苦が流れている。この人間苦の原因は渴愛煩惱にある。この人間苦の解決を諦かにするのが滅道の二諦で

ある。苦の原因である煩惱を処理する道を説くのが道諦であり、その結果煩惱が消滅した境地を説くのが滅諦である。俗諦は生活であり、真諦は宗教である。人間生活の解決は必然的に宗教によらねばならぬことを明かにするのが四聖諦である。そして仏教の説く究極の境地である滅に至るための実践の道が道諦である。従つて宗教生活の中心は道諦にある。

四聖諦は仏教の根本原理である。真宗の教義も畢竟四聖諦に帰する。しかし聖道門と浄土門では、俗諦は同一であるが、真諦は趣きを異にする。すなはち聖道門の真諦は滅道であるが、浄土門のそれは往生信心(會仏)である。

以上は仏教一般に云う真俗二諦であるが、ここに真宗独自の真俗二諦説がある。それは真諦は往生浄土で俗諦は王法爲本である。

真俗二諦の語については、本典化巻末引用の末法灯明記の中に「真諦俗諦遞に因りて教を弘む」の句がある。この語の意を存覚上人は破邪顯正鈔に「仏法王法は一雙の法なり。とりつ二つのつばさのごとし。くるまのふたつのわのごとし。ひとつもかけては不可なり。かるがゆへに仏法をもて王法を守り、王法をもて仏法をさがむ」と説明している。真俗二諦は元來は理論的のものであるが、真宗のそれは従前のものと趣きを異にし、この語を真宗の教義に応用して、實際の規定としたものである。真俗二諦の語が宗義として取りあげられたのは本願寺派では文化文政の頃からとされ、大谷派では明治八年の五ヶ条の御消息から始まったものとされている。

そんなわけで真宗では俗諦に信前と信後と二つの場合がある